

「望ましい身体」とジェンダー

— ダイエットと美容医療の捉える身体 —

飯 野 智 子

実践女子大学人間社会学部非常勤講師

1 身体の規範

1.1 「美」と「健康」

「望ましい身体」を規定する基準、すなわち身体の規範には、ジェンダーによる明確な相違が見られる。男性の身体規範は「健康であること」にほぼ一元化しており、「健康な身体」は男性としての「美しい身体」と矛盾しないと考えられる。しかし、女性の身体には「美」と「健康」という二重の規範が存在し、「美しい身体」と「健康な身体」は必ずしも一致しない。以下はこの身体規範を対照的に図式化したものである。

女性

	領域とするもの	捉えられる身体	扱われる場
〈美〉	— 〈性（セクシュアリティ）〉	— 〈商品〉	— 〈美容産業〉
〈健康〉	— 〈生殖〉	— 〈母体〉	— 〈医学・国家〉

男性

〈健康〉	— 〈産業〉	— 〈労働力〉	— 〈医学・国家〉
	〈軍事〉	— 〈兵力〉	

「美」は女性の「性」（セクシュアリティ）を領域とし、主に美容産業を通して「商品としての身体」に働きかける。「健康」は「生殖」を領域とし、医学を通じた国家管理として「母体」（出産可能な身体）に働きかける。「健康美」のように両者のモデルが重なる場合もあるが、「商品」として価値のある身体と「母体」として価値のある身体は同じものではない。このような二重規範の要因として、(1)近代적性別役割分業に伴って「美」が女性の領域となったこと、(2)人口政策として国家が女性の生殖を管理するようになったこと、(3)医学の発達と大衆への拡大により「身体の他律化」が進んだことなどが挙げられる。

これに対して男性の身体は、近代産業社会に適合的な合理的身体として装飾性が否定され、「美」

から疎外された。しかし、性（セクシュアリティ）に関しては、管理不可能なものとして扱われ、さらに生殖（リプロダクション）に関しても、産む性ではないことから管理を免れた。そして唯一優生思想の観点から、生殖に不適合と見なされた場合のみ管理されることとなった。

身体の規範が異なれば、理想の身体と実際の身体との距離感も男女で異なってくる。次のグラフは、厚生労働省の「平成 16 年国民健康栄養調査結果の概要」（厚生労働省統計要覧）より、「自分の体重の認識状況」の比較である。（表を元にグラフを作成）

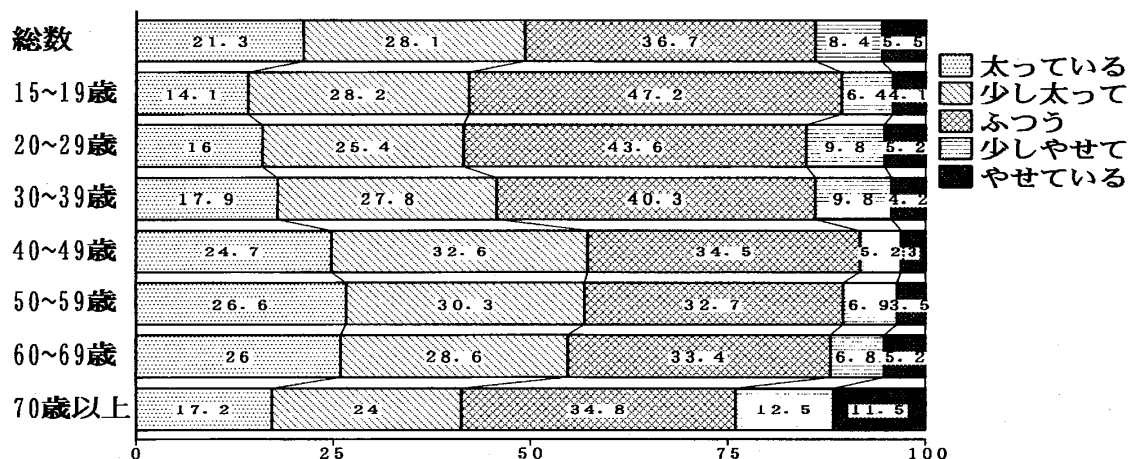


図1 自分の体重の認識状況（女性）

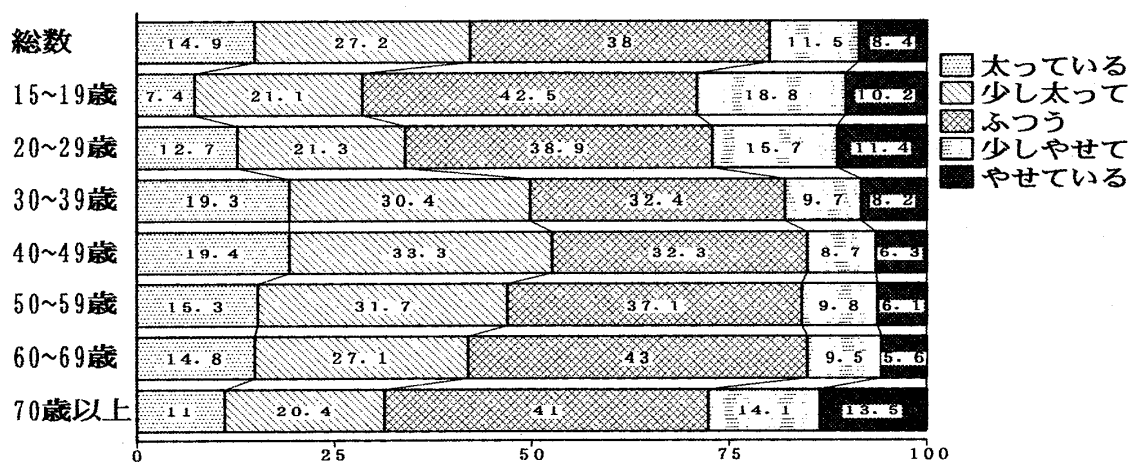


図2 自分の体重の認識状況（男性）

これを見ると、自分の体重を「ふつう」と認識する割合は、男女で大きな違いはない。ただ男性は「ふつう」であるという認識が 30~49 歳では相対的に低く、60 歳以上では若年の頃と変わらなくなる。それに対して女性は、40 歳以上は一貫して若年の頃より低い。男女差が大きいのは「太っている」という認識で、30~39 歳以外は、女性のほうが「太っている」「少し太っている」と認識している割合が高い。また、全ての年齢層で男性は女性よりも「やせている」「少しやせている」と認識している割合が高い。特に 15~29 歳の男性は、70 歳以上の男性よりも自分のことを「やせている」と認識している。このような認識の違いは、性別、年齢による「標準体重」の

考え方によって出てくる。「美容体重」という言葉もあるように、女性は「美」的な体重を基準にするであろうし、年齢が高くなると、男女共「健康」的な体重を重視する傾向が高くなると思われる。

次に、「適正体重の認識」つまり自分の体重の認識と実際の体重との一致状況である。これは BMI (BODY MASS INDEX、体重 Kg を身長 m の 2 乗で割る。疾病罹患率が最も少ないとされる 22 を標準とする) で 18.5 未満を低体重 (やせ)、18.5 以上 25 未満をふつう、25 以上を肥満として、自分の体重の認識と実際の体重との関係を比較したものである。過小評価とは実際の BMI 区分よりも自分の体重を「やせている」「少しやせている」と認識している場合で、過大評価とは「太っている」「少し太っている」と認識している場合である。

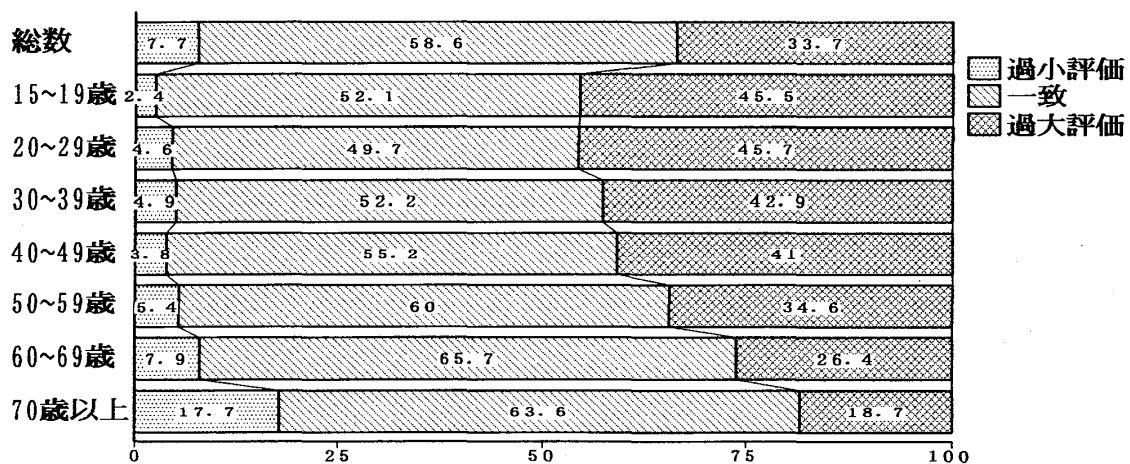


図3 適正体重の認識状況（女性）

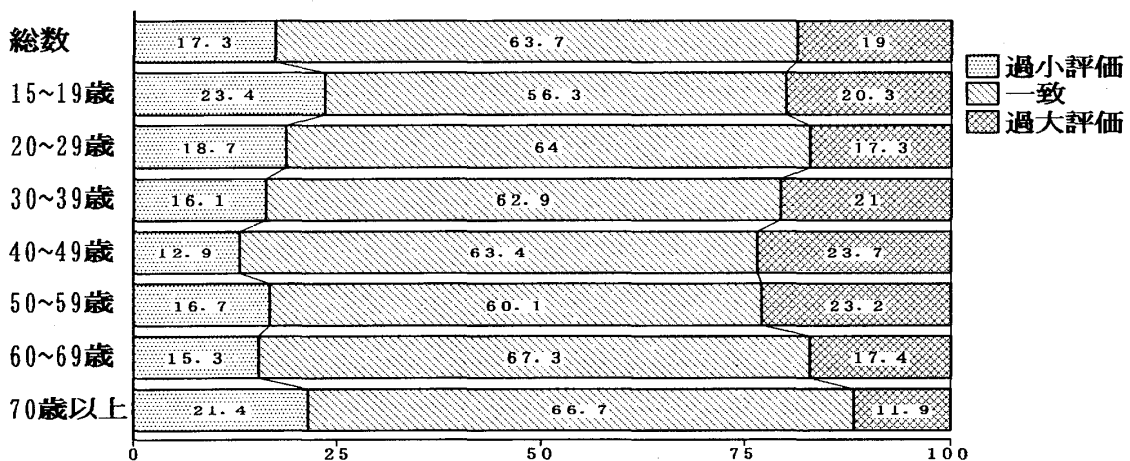


図4 適正体重の認識状況（男性）

男女を比較すると、あらゆる年齢層で女性は男性より自分の体重を過大に評価していることがわかる。15～29歳の若年層をピークに、40～49歳でも40%以上の女性が、適正体重あるいは低体重であるにも関わらず、自分を「太っている」と認識している。男性の場合は女性よりも適正体重と自己認識が一致している割合が高いが、15～29歳では他の年齢と違って、過小評価の割合

が過大評価の割合よりも高い。すなわち若年層の女性は過剰に自分を「太っている」と見なすが、逆に男性は「やせている」と見なしているのである。若い男性に見られるこのような特徴は、男性としての「美」、例えば「たくましい身体」という理想像と比較して自分の身体を貧弱であると捉えているからと考えられる。女性が自分を「太っている」と見なす割合よりは低く、「美の強迫」とまではいえないかも知れないが、何らかの影響を受けていることは確かである。

ダイエットは、女性の身体に対する管理（性と生殖の客体化）という現象の中で、身体の自己管理を通して主体性を獲得し、社会に対して認識主体であろうとする試みとして捉えることができる。⁽¹⁾ しかし誰でも容易に行うことができ、摂食障害のような病を引き起こし生殖機能に影響を及ぼす可能性があるという理由から、特に若い女性に向けて警告が発せられる。一方美容医療は生殖に直接影響を及ぼさず、自由意志によって選択しているごく少数の女性しか行わないと捉えられているので、ダイエットほどの警告はなされない。しかし、美の規範に適応しようとする試みであることは同じである。また、男性の「美」のあり方も変化している。例えばエステティックサロンの2006年の女性市場は2,362億7,000万円で前年比98.8%、男性市場は339億8,700万円で前年比104.5%であり、比率は7:1、男性市場はエステティック総市場の8.5%を占めるまでになった。⁽²⁾ 美容外科では男性の診察件数を正確に把握するようなデータはないが、全患者の内男性比率が35%近いという報告もある。⁽³⁾ エステティックサロンも美容医療も男女共あらゆる年齢層の市場を開拓しようとするので、このような傾向はますます進むと思われる。以下、ダイエットと美容医療への批判や議論を比較し、男女へのプレッシャーの違いを検討することにより、身体の二重規範とジェンダーによる相違を見ていきたい。

1.2 「医学」

ここでは「衛生」と「美容」に関する研究を参考にして、「美」と「医」の結びつきにより生じた問題を検討する。鈴木則子は、明治期に女性に衛生の担い手としての役割が与えられたことで、「健康」「衛生」「賢良」「教育」「美人」の連鎖が生じたとする。そして、「医学・衛生学・理学などの学問領域から洗顔方法や鉛害の少ない白粉の選びかたという実用的知識が女性たちに向かって発信されるとき、衛生は啓蒙家たちの意図を超えて、もしくはズレを生じながら、美容情報としても機能する」⁽⁴⁾ こととなったと分析する。さらに、美容と結びつくことで衛生は一つのマーケットとなり、「衛生や『美育学』は、商品の宣伝や美容所を通じて、美容法や美しくなるために努力することの奨励へとすり替えながら、ひろめられていく」⁽⁵⁾。特に優生思想に基づく身体改良運動が美容と結びつくことによって、新たな市場が誕生した。「健康なことが美しい」という啓蒙主義は、「美しいことは健康の証」という価値観を生み、美の追求に正当性を与えることとなったのである。

また、成田龍一は、1920年代には「『美』と『性』がそれぞれ身体をめぐる独立した領域を形成し焦点をつくり出し『衛生』をふくむ三者が互いに入り組み重なり合う現象が表れ、身体を取り巻く網の目がいよいよ多義に細くなった」⁽⁶⁾ と分析している。身体の正常／異常の軸に加え、美／醜の軸が新たに参入し、衛生と美が結合したという。さらに1940年代に、国による生活

モデルの設定とそのモデルへの強制がなされ、生活の合理化、科学的な構成が試みられ、具体的には例えば食生活がカロリーという単位によって数値化されたとする。加えて成田は、衛生知識の普及や衛生観念の浸透といった衛生環境の変化が女性の意識や女性観を変えたと指摘する。すなわち、(1)衛生・医学に基づき女性に身体への自覚と配慮を促し、(2)「標準的な身体」といった身体の規範を形成する医学、医療の優位を導き、身体の他律化を促す。それは(3)差別と排除をひきおこし、(4)女性に家庭衛生を担う担い手としての役割を固定化したのである。⁽⁷⁾ 医学的な根拠あるいは権威によって形作られる身体の標準が絶対化し、個々の多様性、身体感覚を否定し、標準に納まらない身体は差別・排除される。そして、女性は自分自身の身体だけではなく、夫、子供などの家族成員の身体をも管理するよう要請されるようになった。成田の研究は衛生環境の変化をジェンダーの視点で分析したものであるが、医学の優位性は、ダイエットについても当てはまる。医学は「やせ」と「肥満」の間の「標準」内、例えばBMI値20～25に身体の形、重さを納めるように推奨する。「いきすぎたダイエット」も「食べ過ぎ」も批判される。すなわち身体の多様性は否定されるのである。

ダイエットと美容医療は、女性にとっては共に「美」の領域で美しくなるための手段である。そして、一般的な拒否感ではダイエットに対するよりも美容外科に対するほうがはるかに強い。しかし、生殖の管理という観点からは意味が大きく異なる。ダイエットは母体の健康という点から批判される。母体としての身体よりも美的な身体を選択するということは女性役割の拒否と捉えられ、逸脱行動と見なされる。それに対して美容医療は、母体としての健康を害することはないので、役割放棄とは見なされない。むしろ性的な役割への過剰適応と見なされるのである。

2 ダイエットをめぐる議論

2.1 ダイエット情報の流れ

さて、「美」の提示する「望ましい身体」＝「美しい身体」と、「医」の提示する「望ましい身体」＝「健康な身体」という二つのモデルについての情報は、時に一致し、時に反発する。このような混乱は、ダイエットをめぐる女性の混乱を助長する。しかし、女性のやせ願望を煽るものとして美容産業が「悪者」扱いされているのに対し、医学は自分の身体に対する「適度」で「正常」な関心を喚起し、正しい知識を提供するものとして権威を持っている。このような「医」の提示する「望ましい身体」が一元的で強制的になるのは免れない。「健康」を病理のあるなしで捉え、疾病リスクの少ない体型を統計的に割り出せば、体型の幅、許容範囲は狭まらざるを得ない。そしてその範囲に納まらない体型は「不健康な」体型となる。

ダイエットに関して医学がマスメディアに提供する情報を以下のように分類してみよう。健康専門誌、インターネットの健康サイト、新聞、一般雑誌、女性誌など幅広いマスメディアに情報を提供するが、ここでは一般の人がほとんど接することのない学会誌などの極めて専門性の高いメディアを含めないこととする。

1. 健康リスクの最も低いという観点から数値で示される「健康」の基準。
2. 専門的なレベルの「健康」概念、正しい情報、最新の情報。これは医学関係者以外の一般人が批判的に検討することが困難なレベルである。
3. 医師や大学教授等の医学関係者が、独自の理論や臨床体験から作り上げた健康方やダイエット。例えば最近話題になったものとして“キャベツダイエット”や“ブックスダイエット”などがある。このようなダイエットには一応の効果があり、また極端な食事制限などをするわけではないので、健康被害も少ないといわれるが、適度な運動とバランスの良い食事というダイエットの「王道」からは外れている。しかし、医学関係者という身内意識が働くからか、医師による批判は少ない。
4. 権威。ある食品の効能や効果的な摂取の仕方、運動やダイエット法についてなどに、専門家としての意見を求められ、効果を裏づける発言をする。「医師が認める」「医師が勧める」食品やダイエットは、「安全で効果的」ということになる。近年では実験段階にある食品の成分の効能についていち早く紹介されることなどがあり、そこから新たなダイエット法が生まれることもある。
5. 苦言・警告・アドバイス。根拠のない健康法やいきすぎたダイエット、安易なダイエット食品などに対する批判である。その場合、個々の事例について批判する以外に、詐偽まがいのダイエットにだまされる女性を、「若い女性のやせ願望」という「風潮」というように批判することも多い。また、「女性なら誰でも若く美しくありたいと願うもの」という前提があることも多い。「新たなダイエット法に安易に飛びつく女性」という批判は、女性は占いやまじないを信じるように、科学的に疑わしいものでも信じる非科学的な思考を持ち、広告に対して批判力を持たない受動的な消費者であるというステレオタイプに拠っている。しかし、ダイエット食品の場合、健康被害をもたらすこともあるので、厚生労働省が取り締まる場合もある。最近では中国茶に含まれる薬用成分や体脂肪燃焼効果があるとされたサプリメント、ゼナドリンによる健康被害が問題とされた。また、“にがり”に痩身効果がないことが発表されたり、摂取した脂肪分を包み込んで排出するという脂肪ラッピング食品の広告に排除命令が出された。

2.2 メッセージの「魅力性」

男性は努力や自己管理能力と「美」を結びつける回路を持たないが、女性は生殖（生理・避妊・妊娠・出産・中絶）、体型（栄養の摂取・運動）、衛生、衣装や化粧などの装飾にも管理能力が求められる。身体の健康に関わる事柄は自分のことのみならず家族のことまで女性の責任とされてきた。身体に関心を向けることは女性の役割となった。女性が自分の体重・体型に強い関心を持ち、コントロールしたいと願うのは当然のことである。やせることは、自己の身体に対する徹底した客体化（＝数値で測った身体）と自己管理能力の実現（目的への合理化）を通して、身体の主体であろうとする行為なのである。

しかし、若年層の女性は「出産可能な身体」であるから、正常な妊娠と出産を阻む行動は母体

保護の観点から逸脱行動として批判される。売春や喫煙、飲酒も同様である。そして、将来健康な子どもを出産するために現在の欲望を押さえるようにというメッセージが、教育やマスメディアによって流される。しかし、このようなメッセージにはどれほどの説得力があるだろうか。「メッセージの魅力性」という点からその有効性を検討してみよう。

見田宗介は『現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来—』で、情報が欲望をつくりだす情報化／消費社会における、消費者の欲望を触発する「魅力」について次のように述べている。「必要を根拠とすることのできないものはより美しくなければならない。効用を根拠とすることのできないものはより魅力的でなければならない。離陸は果たしても引力づけられた空間の内にとどまるほかのない、ある中間の気圏の内部にくりひろげられる、この美しさと魅力性とをめぐる熾烈な競争が〈情報化／消費化社会〉の、固有の「楽しさ」「華やかさ」「魅力性」を増殖し展開し続ける、積極的な動因である。」⁽⁸⁾そして、資本主義のシステムの一環であっても、誘惑されてあることは消費者にとって幸福だとする。

美容産業はまさに「美しさ」と「魅力性」そのものを商品としているのであるから、情報化／消費化社会のなかで、「魅力性」をめぐる競争の最も激しい分野の一つであろう。ある商品の「魅力性」を語る物語は非常に短いサイクルで入れ代わる。このようなシステムの中に、ダイエット商品も存在し、やせることで得られる幸福の物語も展開しているのである。ダイエットを試みる女性は正しい情報を知らなかったりだまされているのではなく、「誘惑されてあることの恍惚」⁽⁹⁾に浸っているという側面があることは否定できない。やせる物語とやせない物語を比較してやせる物語がより魅力的ならば、やせるための商品を買うのである。

これに対して、10代前半から20代前半の若い女性にとって、「将来健康な子どもを産むために」ダイエットをやめ、女性たちの基準ではやや太めの体型でいるようにというメッセージはどのような意味を持つのであろうか。「将来のため」「次の世代のため」という言葉は自己犠牲や忍耐と結びつけられ、美化されがちである。一方、現在の欲望を追求する姿勢は自己中心的と批判される。母親が「子どものため」に行動する姿は美しいとされるが、それが妊娠・出産などを身体の実感として捉えられない少女にまで要求される。しかしこのようなメッセージは、ダイエットをする女性の、現状の姿を肯定できないという具体的な苦痛の前では、説得力に乏しいのである。このように「医」の観点からダイエットを捉えると、セクシュアリティの部分は捨象され、もっぱら「母」たる身体への影響のみが語られる。「出産する身体」の強調は、「手段としての身体」というとらえ方を促す。「子供を生みたい身体」は主体であるが、「子供を生むべき身体」は客体なのである。さらに、ダイエットのリスクとして高齢になってからの骨粗鬆症などが示されることも多いが、若い時に美しさに捕われてしまうと、将来さまざまな健康リスクを負うというメッセージは脅迫的である。しかし、例えばそれが真実であろうと、健康リスクは結局は数値に過ぎず、若い女性にとって現在の自分の身体の実感ではありえない。

次に、「無理なダイエットはやめよう」という警告は何を表現しているのか。第一に「あなたは太っていない。あなたの目標体重は間違っている。あなたはダイエットをする必要はない」という目標の否定、第二に「極端に摂取カロリーを押さえるダイエットはやり方として危険で間違っ

ている」という手段の否定である。しかし、目標に関しては、社会は明らかに医学的な理想体型よりもやせた女性を美のモデルとしている。目標体重は、社会的に美しいとされるモデルに倣っているのであるから正しいという反論が可能だ。手段に関しては、ダイエットをしている女性達は、自分の実行しているダイエットが不健康であったり栄養学的に問題があるということを認識していないわけではない。しかし、健康的な正しいダイエットとは結局「適度な運動とバランスの良い食事」すなわち消費カロリーが摂取カロリーを上回るという唯一の方法しかない。選択肢がないのである。このような方法や手段の乏しさも、様々なダイエット法を生み出す一因だといえる。これだけ科学や医学が発達した社会で、何の予防薬も治療薬もないという不合理さに対する不満である。それがもっと早く劇的にやせられるものが研究されているのではないかと、売っているのではないかと期待に結びつく。短期間で効果的にやせるという物語は安易な様に見えるが、より合理的な方法を探そうとしていると捉えることもできるのである。

「医」の捉える女性の身体をめぐる物語に女性自身が魅力を感じないでは、熾烈な競争を繰り広げる美容産業の物語には決して勝てないであろう。美容産業においては「不健康」に感じられるものは商品の多少のニュアンスに過ぎなかったり（「アンニュイな感じ」「退廃的な雰囲気」といった「魅力」）、「健康」ブームを取り入れるなど、「美」と「健康」の距離もさまざまである。しかし最終的には女性の身体の問題はすべて「美」に集約される。美しいことが「健康で」「幸せ」なのだ。一方、医学において「美」の扱いはどうであろうか。「美」の領域は医学外部の問題としてまったく立ち入らないか、深く言及しないという立場をとる。そして「美」よりも優位になるものとして「医」を規定する。健康であることが「美しく」「幸せ」なのである。実際にはこのような「美しいことは健康の証」のほうが説得力を持ってしまう。女性がどちらの身体の規範を受け入れているかは、先に示した適正体重と自己の体重の認識のズレを考えると明らかであろう。

3 美容医療に関する議論

3.1 美は徳／得

ダイエットほど多くの女性が実践しているわけではないが、「美」と「健康」に関する問題として美容医療は重要性を増している。切開手術ではなく薬品やレーザー照射による美容皮膚科学の発達や高齢社会に適応したアンチエイジング美容の可能性など、市場はますます拡大すると思われる。患者の低年齢化も高齢化も進み、男性患者も増加するであろう。そこにはダイエットに対するものとは違った批判が存在する。ここでは美容医療に関する議論を整理し、そこで身体がどのように捉えられているか見ていくこととする。

美容外科手術をめぐる、手術そのものの是非を問う場合、手術を肯定する主張としては、〈美に対する積極的な価値付け（美は徳）〉をまず挙げることができる。「美」は喜びや幸福につながるものであり絶対的な意味を持つという、唯美的な価値観を根拠として、手術を肯定するものである。従って手術の受け取り方は、極力消極的な要素（危険であるなどの手術に伴う要素から、

「健康な体にメスを入れるなんて」「美にとらわれていてもいいのか」「恥ずかしい」という心理的あるいは社会的な要素）を取り去ったものとなる。「美の強迫」が存在したとしても、「美」自体の価値が損なわれるものではないと考える。

次に〈「美しいほうが得」という功利的価値観〉からの肯定がある。得である状況が良いか悪いかという判断は留保し、その状況に合わせるしかないという考えである。前述の主張より積極性は低くなるが、「美の強迫」の存在を認めつつ、「美」の基準に合わせようとするものであるので、現実的で切実な要求によっている。手術を受ける動機としてかなり説得力を持つと考えられる。すなわち美醜は生活全てに関わる問題なので、成功を望むのなら、美しくなりたいのは当然という考えである。美しくなければ就けない職業があるし、美しさが人間関係を決定する場合もある。美しくなるために化粧をしたり、効果的であろうという衣服を選ぶことは普通のことで、外科手術はこの先にあるものに過ぎないというわけである。

3.2 得であることに対する批判

このような外科手術の肯定論に対してなされる批判は二つに分類される。ひとつは「得である」こと自体は認めつつ、そのような社会の価値観自体を批判の対象とし、美容外科は〈過剰適応〉だという主張である。手術を受けるということは、「美しいことは得である」という価値観に苦しめられているにもかかわらず、これを全面的に肯定する行為だということになる。これは、女性の人生が美によって制限されるというシステムを批判したり、功利的な選択をせざるを得ない状況を分析するというアプローチとなる。従って美容外科手術を個人の心理的な問題ではなく、社会的問題だと捉える。

もう一つは、手術肯定論の主張するほどには〈美しいことは「決して得ではない」〉という批判である。確かに第一印象などの短時間の判断では外見の美は評価されるが、人の判断は結局は性格や能力など必要とされるものが評価されたり、総合的に評価されるという内面重視論である。美／醜による偏見と差別は社会の一側面であるが、構造化されているとまでは言えない、それは別の価値（内面）によって超えられると主張する。

美容外科は、「醜いことは不幸である」という、事実かも知れないにせよ否定したい価値観を全面的に認めてしまうことである。つまり、「美」に対する肯定的評価が功利的評価を生むことは否定できないにせよ、さらに高い次元の幸福や美しさ（聖の部分、精神性）がある、あってほしいと願う希望を挫くものである。このような「美の功利主義」は、美は美として特別な価値があるという審美的な価値観とも反する、あけすけな損得勘定である。これを受け入れることはできないという批判は、共感を得られやすいと思われる。

3.3 身体加工の是非 類として、人権として

美容外科手術を身体加工の側面から捉え、どのような身体加工が社会的に認められるか、加工の程度を問うアプローチがある。身体は歴史的な意味があり、なおかつ常に社会的に再生産されていくものである。我々の身体は加工の歴史を背負っているし、また、将来の加工の可能性を内

包している。若いときには耳にピアスをするということは社会的な少数者であると考え躊躇していた人が、中年を過ぎてから「若い人を見ると普通のことだ」と考え、穴をあける場合がある。美容外科手術を受けるなど考えもしなかった人が、加齢に伴うシワやシミをとりたいと考えるようになる。

どのような理由にせよ、それがジェンダーまたは女性の抑圧に関わることであれば、〈人間は身体を加工してきたのだから、加工そのものは肯定される〉という主張がある。どの程度の加工が社会で許容されるのか、相対的な基準しか存在しない。現在の基準では、美容外科手術は許される範囲だと思える人がある。全ての身体加工は、強要さえされなければ、個人の意志と責任において許されるべきだという意見もある。おおよそ常識では考えられないような身体加工を好む人が少数であっても存在する。また、性同一性障害の人などが性別を選択する権利、性的自認に見合った身体を選択する権利は、少しずつ認められるようになっていく。そのような加工は通常、美容外科手術とは事情の異なるものとして、同じ文脈で語られることはない。しかし、外科手術という行為そのものは共通するものである。また、身体に関しては、個人の意志、権利が最大限尊重されるべきという価値観は、近代社会では共通のものである。そのような価値観からすると美容外科手術は、歴史的に見て正当化されるのみならず、近代的な権利によっても守られるべきものとなる。

3.4 自然な身体観

自分の身体に対する権利の行使について山下柚実は、「地域共同体が崩壊し、他者との関係が薄れていく中で、『私のカラダなんだもの、私の自由にしていはいはず』という、個人主事に基づいた、『私的所有物』として扱う意識が定着していく」と批判する。⁽¹⁰⁾ また、身体加工の権利の主張に対する批判としては、〈「自然」「生まれつき」「あるがまま」の身体を肯定し、加工された身体を拒否する〉という立場からのものがある。当然のことながら、「自然な身体」そのものも歴史的背景を持ち、また可塑性のある身体に他ならない。多くの身体加工が「野蛮な風習」として否定された「近代的身体」がもっとも「自然な身体」と捉えられるというアイロニーも存在する。我々の「自然な身体」観が近代的イデオロギーによって成り立っているとしても（あるいはそれゆえか）、「自然」「生まれつき」「あるがまま」の身体に価値があるという言説は魅力的であり、力を持つ。そして、「自然」の持つ圧倒的な強さから、「人工的な」「加工」には負のイメージが付与される。

特に 90 年代前半から、美容業界の主流は自然指向である。化粧品やボディケア商品には「自然」「癒し」商品とも名付けることのできる一大マーケットが存在する。美容医療はこのような「自然」志向に逆らったサービスに思えるが、実際には「自然」の曖昧さは、美容外科手術の「人工」「加工」をも覆い隠してしまう。手術を受ける人は「他人になりたい」という変身願望を持つわけではない。「まったく違った人生」、「昨日の私にさようなら」という文言は、虚偽の私を捨てて、あるべきはずの私、本当の自分を見つけるという意味なのである。それはアイデンティティを「取り戻す」ことである。「本来は明るい性格なのに、顔のせいでそれが人に伝わらず、暗い日々を過

「私」が、手術を受けきれいになったことにより、本来の明るさを取り戻し、当然得るべき幸せを得る、という物語である。本当の私に戻るだけなのだから、そのための手段である手術を受けることは当然、自然なこととなる。手術を受ける人は、自分の身体にマイナス評価を下したわけだが、身体を社会的な美の基準に合わせることでアイデンティティの修復を図る。自己否定を手術という努力によって自己肯定に転じようとするのである。

このような正当性に対する批判としては、その時々を自己を肯定せずにはアイデンティティの一貫性が保たれず、不安定な状態になってしまうというものがある。「自分は美しくない。美しくない自分は受け入れられない」という〈自己否定を問題とする〉主張である。現在の自己を受け入れられないということは、潜在的には将来の自己を否定することになり、結局そのような心理では、手術によって一時の満足感を得られても、また自分を受け入れられずに、手術を繰り返してしまうという危険性が指摘される。このような主張は、自己否定の心理そのものを問題とするので、その解決は、外科手術によっては果たせない、心理学的あるいは精神医学的なアプローチが必要だという。

まとめ

以上、女性の身体に関する「美」と「健康」の二重規範の問題を、ダイエットと美容医療をめぐる議論から検討してきた。「美」の発する情報は、「美の鎖」あるいは「美の強迫」となって構造化している。一方「健康」の発する情報は、「正当性」「権威」として構造化している。しかし「美」から身体を捉えるにしろ「健康」から捉えるにしろ、一旦客体化を通すことによって、主体性の獲得への意志は生まれる。女性にとっては同じ「美」に属するダイエットと美容医療であるが、ダイエットは母体への影響という観点から批判され、美容医療への批判はまったく別の観点からのものとなる。

「身体史の射程」において荻野美穂は、身体とセクシュアリティを対象化する場合のジェンダーによる違いについて次のように指摘している。「人間＝男という前提がほとんど空気のように意識されないまま内面化されてしまった世界では、かえって男は自分を『男』として対象化してみる契機を失ってしまったのではないだろうか。そのため『人々』ではないそれ独自のものとしての『男』の身体やセクシュアリティを研究することには、あえて思い至らなかったのかもしれない」⁽¹¹⁾。荻野は歴史研究の対象について言及し、「男＝普遍、女＝特殊という知の枠組み、女のみを性的、肉体的なものに見なしてきた従来の感覚のもとでは、とにかく身体＝女の身体と理解されてしまうおそれ」があり、『男にはない臓器』である子宮と卵巣、『男にはない現象』である月経や妊娠・出産の存在がこの思い込みを正当化⁽¹²⁾ するという。「見られる」商品として女性の身体は客体であるという捉え方は身体を軸に展開される主体－客体認識の一面でしかない。女性は（「商品」としてであれ）、何を着たいか、どのような化粧をしたいか、どのように見せたいのか、主体的に判断している。「大衆が消費することは、それが資本の増殖過程の一環をなすからといっ

て、それが大衆自身の喜びであることに変わりはない」⁽¹³⁾ のである。

すなわち、美しく装うことにはそれ独自の喜びがあるのである。「特殊な身体」をもつ女性はその特殊性を楽しむことができるが、「普遍的な身体」しか持たない男性に、その喜びはないのである。例えば、自分が何を着たいのか、何色が似合うのか、どのようなシルエットが好きなのか、自分で分からない男性は多い。自分の髪質を把握し、どのような髪型が向いているかわかっている男性は少ない。自分の体重が標準値なのかどうか知らない男性もいる。女性ならば当たり前と思われる自己の身体への配慮、客体視、それを通して得られる主体性が欠如しているのだ。着るものを自分で買わず、すべて妻に買ってもらう男性、毎日のシャツ、スーツ、ネクタイ、すべて用意してもらう男性、石鹸やシャンプーなど、身体につけるものを人任せにする男性に、身体を通しての主体性という感覚はない。男性の主体性は無前提に肯定されているからであり、身体には二重の規範は存在しない。男性には「美容体重」は存在せず、健康的意味でのみダイエットが問題となる。そして、「見られる」商品でないということは、自己の身体への無頓着さを生み、同時に装飾の喜び、自己表現の喜びが相対的に奪われていることになるのである。しかし、主体的であるとされ、「美」から疎外されてきた男性の状況も変化しつつある。男性が「美」とどのような距離感を持って接してきているのか、あるいはまた、煙草や肥満といった「健康」を脅かすものが男性の身体感にどのような影響を与えているのか、「主体」であるがゆえに特別に注意を払われることのなかった男性の身体管理と自己認識を検討することが、身体とジェンダーの関係を研究する上で、これからの課題となるであろう。

註

- (1) 浅野千恵、1996、『女はなぜやせようとするのかー摂食障害とジェンダーー』勁草書房など
- (2) 矢野経済研究所、2007、『2007年版エステティックサロン市場に関する調査結果』より
- (3) 「何百万円も投じて美容外科に“はまる”中高年男性が増殖中」『週間ダイヤモンド』2004年1月24日号、p.109
- (4) 鈴木則子、2004年、『『女学雑誌』にみる明治期『理想佳人』像をめぐる』栗山茂久・北澤一利編『近代日本の身体感覚』青弓社、p.146
- (5) 鈴木「同上書」p.156
- (6) 成田龍一、1993、「衛生意識の定着と『美のくさり』－1920年代、女性の身体をめぐる一局面－」『日本史研究』366号、日本史研究会、p.75
- (7) 成田、1990、「衛生環境の変化のなかの女性と女性観」女性誌総合研究会編『日本女性生活史第4巻近代』東京大学出版会、p.117
- (8) 見田宗介、1996、『現代社会の理論－情報化・消費化社会の現在と未来－』岩波書店、p.36
- (9) 見田『同上書』p.33
- (10) 山下柚実、2004、「美容整形という身体改造に感じる『違和』」『中央公論』119(7)、中央公論社、p.130

- (11) 荻野美穂、1993、「身体史の射程－あるいは、何のために身体を語るのか－」『日本史研究』366号、日本史研究会、p.57
- (12) 荻野「同上」p.58
- (13) 見田『前掲書』p.37

文 献

- 荻野美穂、1988、「性差の歴史学－女性誌の再生のために－」『思想』768巻、岩波書店
- 川添裕子、2001、「美容か手術と外見－『普通になりたい』」『化粧文化』41、ポーラ文化研究所
- 川添、2003、「美容外科手術とジェンダー」『ジェンダーで読む健康／セクシュアリティ』根村直美編著、明石書店
- 塩谷信幸、2000、『美容外科の真実 メスで心は癒せるか?』講談社
- 末武信宏、1989、『危ない美容外科とエステ、良い美容外科とエステ』エール出版社
- 高木サユリ・橋本洋平・大庭英信、2003、「美容外科・形成外科の可能性」『現代のエスプリ』430
- 大 博善、1991、『美容外科整形の内幕』医事薬業新報社
- 独立行政法人国民生活センター、2004、『美容医療に関わる消費者被害の未然防止に向けて』
- 成田龍一、1993、「近代都市と民衆」近代日本の奇跡9『都市と民衆』吉川弘文館
- 日本嗜癪行動学雑誌、2002、2003、『アディクションと家族』 家族機能研究所、19巻1号、20巻3号
- 林正秀、1979、「医学に美容は不要か－美容整形の市民権をめぐる－」『思想の科学』112、思想の科学社
- 百束比古、2005、『間違いだらけの美容外科選び 後悔しない病院のかかり方』PHP 研究所
- 特別企画 容姿と美醜の心理、2004、『こころの科学』117、日本評論社
- アンソニー・シノット、1997、『ボディ・ソシアル 身体と感覚の社会学』高橋勇夫訳、筑摩書房
- キャスリン・J・ゼルベ、1998、『心かが身体を裏切るとき 増え続ける摂食障害と統合的治療アプローチ』藤本淳三・井上洋一・水田一郎監訳、星和書店
- ジェニー・ロス、2000、『食べ過ぎることの意味 過食症からの解放』佐藤美奈子訳、誠信書房
- ロス、2000、『食べ過ぎてしまう女たち「愛」の依存症』講談社
- M・ボスキン・ホワイト、W・C・ホワイト Jr.、1991、『過食と女性の心理』杵渕幸子、森川那智子、畑田真司、久田みさ子訳、星和書店
- ナオミ・ウルフ、1994、『女たちの見えない敵 美の陰謀』曾田和子訳、TBS ブリタニカ
- R・T・シャーマン、R・A・トンプソン、1997、『良い子と過食症 家族と援助者のための Q&A』本郷豊子訳、創元社